

## 被災者<sup>28名</sup> 安否不明者家族 それぞれの帰国

# わが子が選んだ地への

# 怒りと悲しき

# そして感謝と涙



地震発生から2週間が過ぎた。

いまだに安否がわからない人、九死に一生を得た人、そして、それを支える家族たち。さまざまな思いでNZに渡り、心に痛みを抱えての帰国ドキュメント

「現地に来るときに、わずかな望みをもって来たのですが、今日の現場を見学すると、そのわずかな望みも断たれたな、という感じがしました」  
2日、ニュージーランド留学中に被災した、連本優喜さん(22)の父・豊さんは、娘がいたであろうビルの倒壊現場を目の当たりにし、涙をこらえて、こう取材に応じた。  
日本時間、2月22日、午前8時51分。ニュージーランドを襲った大地震は、160人以上の死者を出し、4日現在、日本人28人の安否も不明のままだ。  
知らせを受けた家族は、すぐさま現地に駆けつけた。が、多くの日本人が被災したクライストチャーチのCTVビルは危険区域となっており、近づくことも許されない。  
そんな家族の心境について、兵庫教育大学の富永良喜

教授(臨床心理士)は、「つらい感情を早期に出して語ることがいいとされていましたが、アメリカの9・11のテロのとき、それは逆に回復を遅らせるということがわかりました。否認、怒り、絶望、これは当然の反応。しかし、それに対して身体も消耗して

きます。今はむしろ、家族が求めている情報を出すなどの手助けが一番です」

ニュージーランド政府は「現場に行きたい」という家族の願いを受け入れ、入国から1週間、ようやく倒壊したビルを訪れることを許可した。バスから見た風景は子どもたちが学んだビルの面影すらなかった。窓越しに手を合わせ、涙を流し、言葉は出ない。

安否不明者家族の支援をした、国際医療救済団体の「AMD」によると、

「ご家族は、現実を受け入れないといけない、でも受け入れることができない、そんな気持ちが悪く、ずいぶん大変な思いをされていたようです。中には頭痛や不眠を訴える方、特に毎日緊張していたせいで、身体全身に力が入っていたため、湿布をた





成田空港に到着した奥田建人さんは、このまま都内の病院へ搬送された

くさん使ったと報告を受けています」

子どもたちの安否情報、今後の見通し、いつまでこの国にいればいいのか……。何ひとつ欲しい情報が入らない日々。それでも、現地の警察から身体的な特徴の聞き取りやDNA鑑定、発生1週間後の黙とうと、受け入れざるをえない現実との闘いが続く。

「ご家族たちは、毎晩みながら話しかけをして、少し元気になられたかと思えば、ご遺体収容所での献花などで現実を見て、また落ち込んだり、激しい気持ちのアップダウンがあったようです。毎日、午後5時に、外務省の方とミーティングをしていました。現

地の警察も、それぞれの家族についてくれたようですが、身元確認の話になると、夜遅くまで続いたようです」

(前出・AMDA)

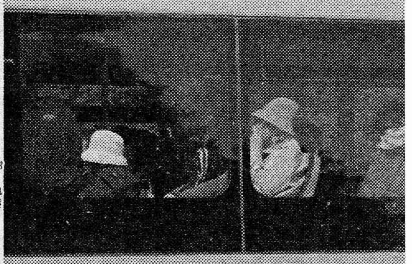
ビル倒壊現場を訪れた翌日、家族たちは身元がわからない遺体が安置されている、軍事基地に足を運んだ。この日の時点で、死者は161人。そして、身元がわかっていないのは、わずか23人しかない。この中に、わが子はいないのだろうか……。祈るような気持ちで、ひとりひとり、基地の前で献花をした。

そのころ、ニュージーランド政府はある声明を発表。『新たな生存者がいる可能性はない』として、救助活動は打ち切る、と。今後は、遺体の搜索と犠牲者の身元確認へ移行することとなった。

この知らせを受けた、看護師・大坪紀子さんの父は、「最悪の状況であることが理解できた。遺体がいつ発見されるかわからないが、長期戦を覚悟した」

同じく看護師の桜井洋子さんの関係者は、「もっと長く搜索してほしかった」と悔しさをにじませる。助産師の平林祐子さんの父は「本当は一緒に帰りたいかった、また確認しに戻ってくる」と一時帰国の無念を語る。

そしてある家族は、それでも「安否が確認できるまで現地に残りたい」と話している。日本人の多くが被災したC



安否不明者家族はバスで倒壊したビルを訪問。言葉はなく、ただただ涙が……

TVビルは、瓦礫がほとんど撤去された。現在は、あのエレベーターの一部だけが生々しく残り、そのほかは更地になっている。献花台には、被災者家族が救助隊に託した手紙や花束、ぬいぐるみが供えられている。中には、  
『一緒に家に帰ろう。』

お母さんより』  
という、日本語の手書きメッセージが添えられていた。現地へ渡った多くの家族は、4日、一時帰国することに。

行き場のない怒りと悲しみ。わが子を選んだこのニュージーランドという地には、なんの落ち度もない。が、やりきれない気持ちを支えるもの、ない。

家族の気持ちは計り知れないものだが、ここに、ある被災者の父親が寄せた手記がある(下囲み)。悲しみを抱きながらも、幾度も繰り返される『感謝』の言葉。

多くの被災者を出した、富山外国語専門学校の吉田久夫校長も、  
『非常に残念で無念。ただ、現地の救助隊らの昼夜おかず

## 『NZの皆様、日本の皆様へ』

私の娘は「世界に通じる医療従事者」を目指して語学研修中に、今回の地震にあいました。わずかな望みを持ってNZにやってきましたが、残念ながらもまだ発見されず、生存は絶望的です。ここで出会った皆様方の温かい対応・支援に、感謝の意を述べさせていただきます。

地震発生直後からNZ政府は非常事態宣言を発し、文字通り政府・国民が一体となり救出活動にあたっています。その献身的な姿を見て、はるか9000kmも離れた地に留学先を選んだ娘の思いに納得しました。

日本政府は、地震発生直後から、外務省、現地NZ大使館、クライストチャーチ領事館を中心に総力を上げて対応されています。被害を受けた家族が、ややもすると甘えがちになる事柄にも真心を持って対応していただいている姿に頭が下がります。

私の娘の留学先を斡旋してくれた会社は、地震発生以降、つらくて寝れない家族に対し、24時間、1〜2時間ごとに情報を流し続けてくれ、励まし、サポートしてくれました。

娘の友人はあらゆる手段を使って応援してくれました。現地に入るとボランティアの方々で親身になってサポートして下さっています。会社の指示で、急遽任務につかれた方々も、自分を見失いがちな家族の気持ちに寄り添って、対応してくれています。

メディアの方々も被災者の立場をよく考え、核心に迫る報道をしてくれています。まだ娘は見つかりませんが、多くの人々に支えられている娘は、幸せ者だと感じています。

そして、何よりも高い技術力と崇高な精神をお持ちの各国の救援隊、レスキュー部隊の方々には、余震の続く中、危険もかえりみず救助に立ち向かっておられます。ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

最後になりますが、救助にあたる方々が二次災害を受けられない事を、心よりお祈り致します。  
以上





NZへ語学研修中だった国学院栃木中の生徒は、空港で家族と涙の対面

九死に一生を得た、奥田建人さんは、救出直後「脚を切るぞ」といわれた。でも、生きていられるだけいい、と受け入れた」と病院のベッド

## サバイバーズ・ギルト

「子どもたちが、短い人生を精いっぱい生きたことに対し

と、頭を下げた。  
《はるか9000kmも離れた地に留学先を選んだ娘の思いに納得しました》  
情報のおかげに奇立ちを感じ、目の当たりにした、救助隊の懸命な作業。そんな国を選んだ、わが子の選択。子どもたちが選んだ道を、親たちは誇りに思っている。  
連本豊さんは、

の救助作業には大変感謝し、現地の家族も同様の気持ちとかがっています」  
前出の連本豊さんも、「昼夜を問わず、救助活動をしてくださるみなさま、家族のために尽力してくださっていることに、本当に頭が下がっていると思います」



て、ほめてやりたい……」  
と言葉を振り絞り、最愛の娘・優喜さんには、「ホワイトデーに、本人から私の作るハヤシライス我希望されていたのですが、その約束は守ることができなくなりましたので、非常に申し訳ない気持ちです」  
と、語った。

で気丈に語った。そんな奥田さんが、1日、帰国し「日本に着いてホッとしたけれども、不明者がいるので素直に喜べない」とコメントを寄せた。また、同じビル内で被災した升谷文香さんは、救助隊に「お願いだから脚を切らないで、あなたを信じている」と懇願し、切断を免れ無事に救出された。  
黒田奈瑠美さんは、救出直後のインタビューで、まだ大勢の安否不明者がいると知り、涙を流し「どうしよう

## ニュージーランド地震の過程

(日時は日本時間)

- 2月22日・午前8時51分、クライストチャーチ付近でマグニチュード6.3の地震が発生  
・富山外国語専門学校が午後4時から会見し、現地での研修中の生徒ら23人が被災したと発表
- 2月23日・NZのジョン・キー首相が国家非常事態を宣言  
・午後2時半、日本の救助隊が成田空港を出発  
・安否不明の家族らが現地へ出発
- 2月24日・日本の救助隊が、多くの日本人がいたCTVビルに到着し、倒壊現場で救助活動を開始  
・地元警察が、CTVビルから合計47人の遺体が見つかったと発表
- 2月25日・日本政府はNZ赤十字に50万ドルの緊急無償資金協力を決定  
・外務省は日本人の安否不明者は28人と発表
- 2月26日・地元警察が日本人家族55人に身元確認のための情報提供を求め
- 2月27日・外務省は安否不明者の身体的特徴などの情報を家族から聞き出す
- 2月28日・キー首相が被害総額は日本円で最大9200億円に上る可能性があると発表
- 3月1日・地震発生1週間。犠牲者を追悼し、全土で黙とう。確認された死者数は155人に  
・右足を切断した奥田建人君ら栃木の中学生が帰国
- 3月2日・安否不明者の家族の要望で、ビル倒壊現場を訪問
- 3月3日・NZ当局は救助活動を終了し、遺体の収容作業に移行すると宣言  
・日本の救助隊の第1陣、65人が帰国
- 3月4日・安否不明者家族の一部が一時帰国

……と絶句した。  
明暗を分けた、富山外国語専門学校の生徒たち。無事に帰国できたが、事の重大さを日に日に感じ、どの生徒も口を閉ざしてしまった。大切な友達の安否が不明のため、無理はない。これから、彼らを襲う苦しみとは――。  
「サバイバーズ・ギルトという言葉があります。これは、生き残った者の自責感。目の前で大切な人を亡くしてしまつたときに、自分だけ助かっ

てしまい、申し訳ないという気持ちです(前出・電水教授)  
黒田奈瑠美さんは「助けられたというより、助かつてしまった」といった。これは、まさにサバイバーズ・ギルトの症状といえるのではないだろうか。しかし、富永教授は「人によっては、その気持ち

すらいえない人もいます。ですから、自分から表現してくれどときが、チャンスなのです。そこで対応を誤ってしまうと、長期化することがあります。まずは、家族がちゃんと話を聞いてあげること。責任はあなたにあるのではなく、あのビルにある、とちゃんといつてあげてほしいですね」  
特に、右足を切断するといふ、大ケガを負った奥田さんは、次第に今までどおりの生活ができない喪失感に襲われる可能性が大きい。  
また、被災者すべてが、あの大きな揺れを経験したため、トラウマとなつてPTSD(心的外傷後ストレス障害)を起こしかねない。  
「例えば、ちよつとした揺れに反応します。バスや電車の揺れのせいで乗り物に乗らな

